

地域スポーツにおける仲間づくりに関する研究

保健体育教室 · 福元 和行*
遠藤 勝恵**

A Study on the Social Approval of Player in the Sports in Community

Kazuyuki FUKUMOTO*, Katsue ENDO**

I 研究目的

スポーツは健康・体力面に関連した生理的な機能, 自己実現やストレス解消などに関連した心理的な機能, 人間関係や社会的適応と関連した社会的機能, そして経済的機能を持っていると説明されているが¹⁾, 地域社会のスポーツを考える場合にも前3者の機能は重要であると考えられる。

地域社会におけるスポーツの社会的機能については, スポーツでの仲間関係の形成・発展がスポーツを通じての地域づくり, 街づくり^{2,3)}にまで及ぶことが期待されてきた。したがって, 行政によるスポーツ・クラブ連合組織の結成の推奨も, スポーツの社会的機能の充実を図るための施策であったと見ることも出来るように, 地域社会においてスポーツにおける仲間関係の形成・充実は重要であり, これまではこの機能を主にスポーツ・クラブに期待してきた。しかし, スポーツ・クラブ以外の活動の場ではこの機能は期待できないのであろうか。

本研究ではスポーツでの仲間関係の形成とスポーツ経験との関係を取り扱いたい, 質問項目である「あなたは今後, スポーツを継続的に実施するとした場合, 友達や仲間が出来るようになりますか」よりも「あなたは今後, スポーツを継続的に実施するとした場合, 他人に認められることがありますか」の設問の方が, 説明変数はまったく同じであったにもかかわらず, 説明率が高かったため^{注1)}, 後者の設問を採用した。そして, スポーツでの他人による承認についての意識と過去のスポーツ経験及びスポーツ経験にともなう認知的側面との関連を検討することにより, いつ頃の, どのようなスポーツ経験及び認知がスポーツでの他人による承認についての意識と関連が深いかを検討することを目的としている。

他人による承認という場合, カイヨワの言うアゴンとしてのスポーツ活動⁴⁾やマズローの欲求階層説で言う承認(尊敬)の欲求に基礎をおくスポーツ活動⁵⁾に見られるように, スポーツの技術や体力などに関しての自己の卓越性を他人に認められるという側面と他の人から認められ, 受け入れられたいとする欲求である社会的承認欲求⁶⁾や親和欲求⁷⁾を基礎にした社会的相互作用の結果, 認められるという側面があるが, この研究では両者を区別せずに, 一括して扱っている。

* Department of Physical Education, Faculty of Education, Tottori University

** Department of Physical Education, Faculty of Education, Yamaguchi University

II 研究方法

1 データの収集

本研究では山口県教育委員会が1988年12月より1989年1月にかけて郵送法により山口県内の56市町村から収集したデータの中から、男子282名分、女子274名分を採用し、分析を行った。標本の構成は表-1の通りである。

表-1 標本の構成

個人的属性	男子		女子		
	N	%	N	%	
1. 年齢	20才代	70	24.9	57	21.0
	30才代	93	33.1	105	38.6
	40才代	74	26.3	72	26.5
	50才以上	44	15.7	38	14.0
2. 結婚	未婚	72	26.3	23	8.5
	既婚	202	73.7	247	91.5
3. 末子年齢	子供いない	64	24.2	38	14.2
	就学前	71	26.9	66	24.6
	小・中学生	77	29.2	88	32.8
	高・大学生	26	9.8	43	16.0
	社会人	26	9.8	33	12.3
4. 職業	農林漁業	10	3.7		
	商業	26	9.6		
	事務職	90	33.2		
	専門管理職	17	6.3		
	土木・建設	25	9.2		
	公務員	16	5.9		
	無職・その他	87	32.1		
女子	独身事務員			19	7.5
	専業主婦			105	41.5
	兼業主婦			129	51.0
5. 居住地区	商業地区	22	8.0	12	4.6
	住宅地区	115	41.8	130	49.4
	農山漁村地区	138	50.2	121	46.0
6. 通勤時間	15分未満	127	45.7	84	33.3
	15分以上30分未満	61	21.9	40	15.9
	30分以上	58	20.9	10	4.0
	通勤していない	32	11.5	118	46.8
7. 平日の自由時間	3時間未満	135	48.4	110	41.4
	3時間以上4時間未満	82	29.4	71	26.7
	4時間以上	62	22.2	85	32.0
8. 休日の自由時間	4時間未満	57	20.4	97	37.3
	4時間以上7時間未満	78	27.9	96	36.9
	7時間以上10時間未満	70	25.0	38	14.6
	10時間以上	75	26.8	29	11.2

調査内容は山口県教育委員会が実施した「山口県民のスポーツに関する調査」^{註2)}の調査内容の中から、説明変数として個人的属性に関連した9項目、スポーツ経験に関連した40項目、そして目的変数として人々による承認に関連した1項目の合計50項目を採用し、分析の対象とした。なお、目的変数であるスポーツでの他人による承認の測定のための調査項目は「今後、スポーツを継続的に実施するとした場合、他人に認められることがありそうですか」である。なお、スポーツ経験についての調査は小学校時代より調査実施時点までを調査対象期間とした。

2 データの分析

他人による承認と各説明変数との関連の分析には χ^2 分析を使用した。個人的属性関連変数の検定結果の有意性については、表タイトルの右肩につけたアスタリスクにより示した。また、有意差の認められる 2×3 以上の分割表を使用した変数については、残差分析も行った。残差分析の結果は表中の数値の右肩につけたダッカー及びアスタリスクにより表示したが、 \dagger は10%水準の有意傾向、 $*$ は5%水準、 $**$ は1%水準、 $***$ は0.1%水準の有意性をそれぞれ表している。

人々の承認に対する影響要因の分析には変数減少法による重回帰分析を使用した。

なお、他人による承認及びスポーツ経験そして認知に関連した調査項目はすべてリッカート尺度の4段階評定で構成されていたが、スポーツ経験及び認知関連変数については「非常に当てはまる」「かなり当てはまる」を「当てはまる」に、また「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」を「当てはまらない」に統合し直し、解析した。

人々による承認については「非常にありそう」「ややありそう」を統合し直し、「認められると思う」の表記に、また「あまりありそうでない」「まったくありそうでない」を統合し直し、「認められると思わない」の表記に変更し、解析した。

III 結果及び考察

1 目的変数と説明変数のクロス集計結果

1) 個人的属性

表-2は目的変数と男女の関連を見ようとしたものである。スポーツを行うと他人に認められると思う人は男子に多く見られ、女子では少ない。一方、人に認められるとは思わないとする人は女子に多く見られるが、男子では少なくなっており、男女差が見られる。

表-2 目的変数と性別のクロス集計結果***

変 数	男子	女子
認められると思う	35.4	20.3
認められると思わない	64.6 (277)	79.7 (256)

χ^2 値=14.934 ***p<.001

表一3は男子の目的変数と年齢との関連を見ようとしたものである。 χ^2 検定の結果有意差が認められたため、残差分析を行った結果、スポーツを行うと人に認められる、と考える人は他の年齢群と比べて20才代の人に多く、50才以上の人では少ない。また、人に認められる、と思わない人は50才以上の人に多く、20才代の人では少なくなっており、年齢による差が見られる。

表一3 目的変数と年齢のクロス集計結果 (男子)***

変数	I	II	III	IV
認められると思う	52.9***	32.6	34.2	14.6**
認められると思わない	47.1*** (70)	67.4 (92)	65.8 (73)	85.4** (41)
I: 20才代 III: 40才代	II: 30才代 IV: 50才以上	χ^2 値=17.390 **p<.01 ***p<.001		

表一4は男子の目的変数と結婚の関連を見ようとしたものである。 χ^2 検定の結果有意差が認められたが、スポーツを行うと人に認められると思う人は未婚の人に多く、既婚者では少ない。また、人に認められると思わない人は既婚者に多く、未婚の人には少なくなっており、未婚者、既婚者の間に差が見られる。

表一4 目的変数と結婚のクロス集計結果 (男子)**

変数	未婚	既婚
認められると思う	48.6	31.5
認められると思わない	51.4 (72)	68.5 (197)
χ^2 値=6.718 **p<.01		

表一5は男子の目的変数と末子年齢の関連を見ようとしたものである。 χ^2 検定の結果有意差が認められたため、残差分析を行った結果、スポーツを行うと人に認められると思うとする人は子供のいない人に多く、末子は社会人であるとする人では少ない。また、人に認められると思わないと

表一5 目的変数と末子年齢のクロス集計結果 (男子)*

変数	I	II	III	IV	V
認められると思う	48.4**	32.9	36.8	20.0†	16.0*
認められると思わない	51.6** (64)	67.1 (70)	63.2 (76)	80.0† (25)	84.0* (25)
I: 子供いない IV: 高・大学生	II: 就学前 V: 社会人	III: 小・中学生	χ^2 値=11.774 †p<.10 *p<.05 **p<.01		

する人は末子が社会人である人に多く、子供はいないとする人では少ない。子供のいない人の中には未婚の人を多く含むため、このような結果になったと考えるが、差が見られる。

2) スポーツ経験

① 小学校時代のスポーツ経験

表一六は小学校時代のスポーツ経験と目的変数との関連を見ようとしたものである。 χ^2 検定の結果、男女ともすべての変数に有意差が認められたが、男子では全体的に見ると、小学校時代のスポーツ経験は「充実していた」「楽しかった」「休日などに自由に運動した」「スポーツ・クラブに所属した」の順で目的変数との連関が高いが、スポーツ経験関連変数よりも認知関連変数の方に目的変数との連関の高いものが多い。スポーツ経験関連変数の中では「休日などに自由に運動した」が「スポーツ・クラブに所属した」よりも強い連関を示した。また、「地域のスポーツ大会によく参加した」は連関が最も低い。

表一六 目的変数と小学校時代のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

要 因	説 明 変 数	男子		女子	
		χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
小学校時代の スポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	11.982***	.208	12.067***	.218
	休日などに自由に運動した	13.411***	.220	7.635**	.172
	地域のスポーツ大会によく参加した	9.246**	.183	11.494***	.211
	楽しかった	14.649***	.230	13.869***	.232
	充実していた	19.660***	.266	11.882***	.216
	健康に役立った	10.725**	.197	9.700**	.195
	仲間づくりに役立った	9.981**	.190	13.984***	.234
	よい思い出がある	8.686**	.179	23.954***	.313

p<.01 *p<.001

女子では小学校時代のスポーツ経験は「よい思い出がある」「仲間づくりに役立った」「楽しかった」「スポーツ・クラブに所属した」「充実していた」「地域のスポーツ大会によく参加した」の順で目的変数との連関が高いが、「よい思い出がある」の ϕ 係数.313は男女の全変数の中での最高値である。また、女子においても男子の結果と同様に認知関連変数に連関の高いものも多く見られる。スポーツ経験関連変数では連関の強さ順に見ると「スポーツ・クラブに所属した」「地域のスポーツ大会によく参加した」「休日などに自由に運動した」となっており、スポーツクラブ所属経験との連関が最も強く、男子と異なった結果が見られる。

男女ともに.200以上の値を示したのは「スポーツ・クラブに所属した」「楽しかった」「充実していた」の3変数であり、他の変数は男女の両方あるいは片方の数値が低かった。

② 中学校時代のスポーツ経験

表一七は中学校時代のスポーツ経験と目的変数との関連を見ようとしたものである。 χ^2 検定の結果、男女ともすべての変数に有意差が認められたが、男子では中学校時代のスポーツ経験は「充実していた」「健康に役立った」「仲間づくりに役立った」「よい思い出がある」「スポーツ・クラブに所属した」「楽しかった」「休日などに自由に運動した」の順で連関が高い。そして、スポーツ経

表一七 目的変数と中学校時代のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

要 因	説 明 変 数	男子		女子	
		χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
中学校時代の スポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	12.659***	.214	5.792*	.150
	休日などに自由に運動した	11.380***	.203	4.856*	.138
	地域のスポーツ大会によく参加した	8.912**	.179	8.696**	.184
	楽しかった	12.346***	.212	8.799**	.185
	充実していた	17.552***	.252	7.192**	.167
	健康に役立った	14.555***	.229	11.006***	.207
	仲間づくりに役立った	14.012***	.225	7.118**	.167
	よい思い出がある	13.049***	.219	13.912***	.239

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

験関連変数よりも認知関連変数の方に目的変数との連関の高いものが多い。スポーツ経験関連変数の中での連関の強さは「スポーツ・クラブに所属した」「休日などに自由に運動した」「地域のスポーツ大会に参加した」の順番になっており、スポーツ・クラブ所属経験の連関が最も強い。

女子では連関の強い順に「よい思い出がある」「健康に役立った」と続くが、.200を越えたのはこの認知に関連した2変数だけであり、他の変数の連関は低く、全体的に見ると目的変数との連関が低いものが多い。そして、男女に共通して.200以上の値を示したのも、この2変数であった。

③ 高校時代のスポーツ経験

表一八は高校時代のスポーツ経験と目的変数の関連を見ようとしたものである。男女ともすべての変数に有意差が認められた。男子の変数の連関の強さは、高校時代のスポーツ経験は「よい思い出

表一八 目的変数と高校時代のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

要 因	説 明 変 数	男子		女子	
		χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
高校時代の スポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	6.073*	.148	6.684**	.161
	休日などに自由に運動した	4.050*	.121	2.500	.099
	地域のスポーツ大会によく参加した	6.596*	.155	0.431	.041
	楽しかった	19.727***	.267	10.704**	.204
	充実していた	20.394***	.271	6.918**	.164
	健康に役立った	15.394***	.236	8.281**	.180
	仲間づくりに役立った	21.323***	.277	17.141***	.258
	よい思い出がある	26.657***	.312	10.266**	.203

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

出がある」「仲間づくりに役立った」「充実していた」「楽しかった」「健康に役立った」の順で続いているが、上位 5 変数はすべて認知関連変数であり、「よい思い出がある」の .312 を最高にすべての変数が .200 を上回っている。いっぽう、スポーツ経験関連変数は 3 変数とも連関の値が低く、認知関連変数の連関の相対的強さが際だっている。

女子では「仲間づくりに役立った」「楽しかった」「よい思い出がある」の 3 変数が .200 以上の値を示したが、いずれの変数も認知関連変数である。そして、スポーツ経験に関連した 3 変数はいずれも低い連関係数しか示していないため、男子の分析結果と同様、認知関連変数の目的変数との連関の相対的強さが目立っている。

また、男女に共通して .200 以上の連関の強さを見せた変数は「仲間づくりに役立った」「楽しかった」「よい思い出がある」の 3 変数である。

④ 19才～22才のスポーツ経験

表一 9 は 19 才～22 才のスポーツ経験と目的変数との関連を見ようとしたものである。男子では 7 変数すべてに有意差・有意傾向が認められたが、女子では 1 変数のみに有意差が認められた。

表一 9 目的変数と 19 才～22 才のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

要 因	説 明 変 数	男 子		女 子	
		χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
19才～22才の スポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	12.385***	.219	7.255**	.172
	休日などに自由に運動した	13.543***	.229	0.177	.027
	地域のスポーツ大会によく参加した	3.516 [†]	.116	0.321	.036
	楽しかった	32.395***	.354	2.022	.091
	充実していた	33.343***	.360	1.061	.066
	健康に役立った	26.606***	.321	2.157	.094
	仲間づくりに役立った	26.212***	.318	2.679	.105
よい思い出がある	20.184***	.281	2.168	.096	

[†]p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

男子の変数の連関の強さは「充実していた」「楽しかった」「健康に役立った」「仲間づくりに役立った」「よい思い出がある」「休日などに自由に運動した」「スポーツ・クラブに所属した」の順で続いているが、高校時代と同様、上位 5 変数を認知関連変数が占めており、「よい思い出がある」のみが .300 を下回っているだけで、他の 4 変数はいずれも .300 を上回っている。特に、「充実していた」「楽しかった」は .350 以上の連関の強さを見せ、全時代区分の全変数の中で 1 位、2 位の連関の強さを示している。そして、残りの変数である「健康に役立った」「仲間づくりに役立った」も全時代区分の全変数の中の 3 位、4 位を占めており、認知関連変数の連関の強さが際だっている。スポーツ経験関連変数では連関の強さが「休日などに自由に運動した」「スポーツ・クラブに所属した」「地域のスポーツ大会によく参加した」の順番になっているが、認知関連変数では他の時代区分と比較して強い連関が見られたのに対して、スポーツ経験関連変数の係数では他の時代区分と比較して連関の強さに差が見られない。

女子の変数で有意差が認められたのは「スポーツ・クラブに所属した」の 1 変数のみであり、ス

スポーツ・クラブの所属経験がスポーツでの他人による承認に関連性を持つことがわかるが、係数から判断すると、連関の強さは弱い。

⑤ 23才以降のスポーツ経験

表-10は23才以降のスポーツ経験と目的変数の関連性を見ようとしたものである。男子での連関の強さは「仲間づくりに役立った」「健康に役立った」「スポーツ・クラブに所属した」「楽しかった」「よい思い出がある」「充実していた」の順となっているが、認知関連変数に相対的に連関の高いものが多く見られる。最も高い連関を示したのは「仲間づくりに役立った」であるが、23才以降のスポーツ経験の中で他人を認め、他人に認められる関係を築き、スポーツが仲間づくりに役立った、と認知している人に、今後のスポーツ活動で好ましい人間関係を構築していく人が多いことは十分うなずけることである。また、スポーツ経験関連変数である「スポーツ・クラブに所属した」は全時代区分の中でのこの変数の最大値を示したが、仲間をともなった活動であるスポーツ・クラブでの人間関係についての経験が影響していると考ええる。

表-10 目的変数と23才以降のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

要 因	説 明 変 数	男子		女子	
		χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
23才以降の スポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	17.460***	.252	16.768***	.258
	休日などに自由に運動した	9.775**	.189	15.581***	.249
	地域のスポーツ大会によく参加した	8.602**	.177	10.066**	.200
	楽しかった	17.189***	.250	4.429*	.133
	充実していた	12.892***	.217	7.211**	.170
	健康に役立った	18.476***	.260	8.459**	.184
	仲間づくりに役立った	19.796***	.268	12.854***	.227
	よい思い出がある	14.558***	.232	7.918**	.181

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

女子では連関の強い順に「スポーツ・クラブに所属した」「休日などに自由に運動した」「仲間づくりに役立った」「地域のスポーツ大会に参加した」となっているが、男子と同様、「スポーツ・クラブに所属した」に相対的に強い連関が見られる。また、「休日などに自由に運動した」には係数の大きさで劣るが、「地域のスポーツ大会によく参加した」も.200の値を示している。他の時代区分では認知関連変数の優位が目立ったが、23才以降のスポーツ経験ではスポーツ経験関連変数の連関の強さが目立っている。認知関連変数では「仲間づくりに役立った」が目立つ程度であり、他の時代区分に比べて連関が弱いといえる。

表-11は現在のスポーツの実施状況と目的変数の関連性を見ようとしたものである。 χ^2 検定の結果、すべての変数に有意差・有意傾向が認められた。男子では連関の強さが「スポーツ・クラブに所属している」「休日などに自由に運動している」の順になっており、現在スポーツ・クラブに所属している人の方が休日などに個人で、あるいは家族や少人数の仲間と自由に運動を行う人よりもスポーツを行うと人に認められる、と思っている人が多いということであるが、その差はあまり大きくない。

表-11 目的変数と現在のスポーツの実施状況のクロス集計結果

要 因	説 明 変 数	男子		女子	
		χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
現在のスポーツの 実施状況	スポーツ・クラブに所属している	12.614***	.225	14.490***	.256
	休日などに自由に運動している	11.805***	.206	2.999 [†]	.108

[†]p<.10 ***p<.001

一方、女子の方では「スポーツ・クラブに所属している」が「休日などに自由に運動している」を連関の強さで大幅に上回っている。つまり、女子ではスポーツ・クラブ所属者にスポーツを行うと人に認められると考えている人が、休日などに自由に運動する人に比べて断然多いということであり、男子との明確な違いとなっている。

以上がクロス集計の結果であるが、個人的属性については性別、そして男子の方で年齢、結婚、末子年齢に有意差が認められたが、女子の方には有意差の認められる変数は見られなかった。

スポーツ関連変数及び認知関連変数では、認知関連変数に目的変数との連関の強い変数が多く見られ、男子の方では全時代（現在を除く）を通じて認知関連変数の優位が目立っている。また、女子の方では高校時代までは認知関連変数の優位が目立っているが、19才以降になるとスポーツ経験に関連した変数に連関の高いものが目立ってくるようになり、男子との違いを見せている。

具体的なスポーツ行動に関わる変数を目的変数とした場合、説明変数の中のスポーツ経験関連変数との強い関連性が見られ^{8,9,10}、認知に関わる変数を目的変数に設定した場合、認知関連変数との強い関連性が見られる¹¹、という結果をこれまでの研究で得ているが、本研究のクロス集計結果はこれらの先行研究を支持する結果となっている。

認知関連変数の中で目立った変数としては、男子では3つの時代で最も強い連関を示した「充実していた」や各時代で比較的安定した連関を見せた「楽しかった」を挙げることが出来よう。また、女子の方では全般的に見て男子ほど目的変数との連関が強くなかったが、3つの時代で最も強い連関を示した「よい思い出がある」を挙げることが出来よう。

スポーツ経験関連変数では男子では「スポーツ・クラブに所属した」と「休日などに自由にスポーツした」の間で、一方が他方を連関の強さで上回ったのが前者で3時代、後方で2時代となっており、スポーツ・クラブの所属経験者にスポーツで他人に承認される、と考える人が常に多いとは言えないことを示唆していると考えられる。一方、女子ではどの時代でも「スポーツ・クラブに所属した」が上回っており、男女差が見られる。

時代別の連関では男子では19才～22才の変数、女子では小学校時代の変数に相対的に連関の強いものが目立っている。

2 重回帰分析の結果

1) 男子

表-12は男子の重回帰分析の結果である。この分析では多重共線性を排除するため、変数間に0.700以上の相関の見られた、「小学校時代のスポーツ経験は仲間づくりに役だった」の変数を削除し、

表-12 重回帰分析の結果（男子）

変数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	F値	偏相関係数
年令	0.121	0.032	0.245	14.660***	0.274
居住地区	-0.098	0.050	-0.128	3.827 [†]	-0.144
平日の自由時間	-0.084	0.039	-0.136	4.563 [*]	-0.157
中学校時代に自由に運動した	0.188	0.077	0.174	5.906 [*]	0.178
高校時代に自由に運動した	-0.145	0.079	-0.150	3.348 [†]	-0.135
高校時代のスポーツ経験は楽しかった	0.201	0.078	0.203	6.735 [*]	0.190
19才～22才のスポーツ経験は楽しかった	0.243	0.067	0.250	13.053***	0.260
現在、自由に運動している	0.152	0.063	0.155	5.766 [*]	0.176
		重相関係数(2乗)	0.551(0.304)		
		F値	9.815***		

[†]p<.10 ^{*}p<.05 ***p<.001

解析を行った。

解析の結果、8変数が抽出されたが、8変数の内訳は個人的属性に関連した3変数とスポーツ経験に関連した3変数、そして認知に関連した2変数であり、いずれの要因群の変数も含まれている。

スポーツ活動での他人による承認に最も影響力を持つのは「年令」であるという結果が見られるが、若い人は他人に認められると思う人が多く、年令が上がるにつれて思わない人が多くなるということを表している。そして、2番目に影響力を持つのは「19才～22才のスポーツ経験は楽しかった」である。また、「高校時代のスポーツ経験は楽しかった」にも有意差が認められるが、過去に楽しいスポーツ経験をした人の楽しさ経験の内容の中には、他の人との交流も含まれているため、今後のスポーツ活動でも他人に認められると考える人が多いと考える。

「休日などに自由に運動した」は中学時代、高校時代、現在の3変数に有意差・有意傾向が認められ目に付く。高校時代の結果については、高校時代のクロス集計結果と異なる逆符号がついているため信頼性に疑問がないわけではないが、他の2変数も存在しているため、見逃してはならない要因であると考え。カイヨワの言うアゴンとしてのスポーツ活動、あるいはマズローの欲求5段階説による承認（尊敬）の欲求に基礎をおくスポーツ活動の場合、技術の程度の面から見て、スポーツ・クラブに所属し、活動した方が他人に認められたいという欲求を満足させやすいと考える。また、活動形態から見ても比較的多くの仲間と活動を共にすることを特徴とするスポーツ・クラブでは、他の人と認め合う関係を形成しやすいと考える。しかし、この分析結果ではスポーツクラブ所属経験の影響は認められず、休日の自由な活動がリスト・アップされている。したがって、この結果は地域のスポーツが競技的スポーツとしてよりもレクリエーション的スポーツとしての色彩が濃く、技術程度や活動形態の如何に関係なく社交の手段として機能していることを示唆しているものとする。そして、また一方では、スポーツ・クラブといいながらも、クラブらしい人間関係が希薄なクラブが多く存在することを示唆している可能性もある。

個人的属性に関連した変数である「平日の自由時間」は平日の自由時間の多い人にスポーツ活動で他人に認められると思う人が多く、短い人に思わない、とする人が多いことを示している。

2) 女子

表-13は女子の重回帰分析の結果である。この分析では多重共線性を排除するため、変数間に0.700以上の相関の見られた「中学校時代にスポーツ・クラブに入って運動した」「中学校時代のスポーツ経験は仲間づくりに役立った」「高校時代スポーツ・クラブに所属した」「高校時代地域のスポーツ大会によく参加した」「19才～22才に休日などによく運動した」の5変数を削除し、解析を行った。

表-13 重回帰分析の結果 (女子)

変数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	F値	偏相関係数
年令	0.064	0.031	0.148	4.139*	0.164
小学校時代のスポーツ経験にはよい思い出がある	0.160	0.058	0.208	7.743**	0.222
23才以降に自由に運動した	0.146	0.062	0.177	5.482*	0.188
現在、スポーツクラブに所属し運動している	0.229	0.058	0.289	15.448***	0.306
		重相関係数(2乗)	0.479(0.230)		
		F値	11.171***		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

解析の結果4変数が抽出されたが、4変数の内訳は個人的属性に関連した1変数、スポーツ経験に関連した2変数、そして認知に関連した2変数であるが、いずれの要因群の変数も含まれている。

女子でスポーツ活動での他人による承認に最も強い影響力を持っているのは「現在、スポーツ・クラブに所属し、運動している」であり、男子では抽出されなかった要因である。日常的・継続的に活動している集団であるスポーツ・クラブに所属して運動している人は、技術程度、活動形態から見て他の人と認め合う関係を形成し易い。また、形成出来ているからこそスポーツ・クラブを脱退せずに、所属を継続し運動していると見ることが出来よう。次いで、強い影響力を持っているのが「小学校時代のスポーツ経験にはよい思い出がある」であり、スポーツでの人間関係に関連したよい思い出の重要性を示唆していると考ええる。さらに、規定力の強さ順に「23才以降に自由に運動した」「年令」と続くが、自由な運動は男子と同様に女子においても社交の場として、仲間づくりの場として機能していることを示していると考ええる。なお、「年令」は男子の結果と同様、若い人に認められると思う人が多く、年令が上がるにつれて認められると思わないとする人が多くなる、という関係を表している。

IV 要 約

本研究では過去のスポーツ経験及びスポーツ経験にともなう認知的側面とスポーツでの他人による承認についての意識との関連を検討することにより、いつ頃の、どのようなスポーツ経験及び認知が他人による承認についての意識と関連が深いかを探ろうとしたが、結果は以下のように要約できる。

1 個人的属性に関連した変数で有意差の認められたのは性別、そして男子の方で年令、結婚、末

子年令であったが、女子では有意差の認められる変数は見られなかった。

2 スポーツ関連変数及び認知関連変数では、男子の方は全時代（現在を除く）を通じて認知関連変数との連関の強さが目立っている。また、女子の方でも高校時代までは認知関連変数との連関の強さが目に付くが、19才以降になるとスポーツ経験関連変数との強い連関が見られた。

認知関連変数の中で目立った変数としては、男子では「充実していた」「楽しかった」を、また女子では「よい思い出がある」を挙げることが出来る。

スポーツ経験関連変数では、男子の方では「スポーツ・クラブに所属した」と「休日などに自由に運動した」の目的変数との連関に大差はなかった。一方、女子では全時代とも「スポーツ・クラブに所属した」が優位であった。

時代別の連関では男子では19才～22才の変数、女子では小学校時代の変数に相対的に連関の強いものが目立っている。

3 重回帰分析の結果、男子では「年令」「19才～22才のスポーツ経験は楽しかった」「高校時代のスポーツ経験は楽しかった」「中学時代に自由に運動した」「現在、自由に運動している」「平日の自由時間」「居住地区」「高校時代に自由に運動した」の8変数が抽出された。

女子では「現在、スポーツクラブに所属して運動している」「小学校時代のスポーツ経験にはよい思い出がある」「23才以降に自由に運動した」「年令」の4変数が抽出された。

本研究では仲間関係の形成に関係の深いスポーツでの他人による承認について、スポーツ経験に立脚した認知面の影響が強いこと、また、男子ではスポーツ・クラブの所属経験だけでなく自由な運動も連関が深いことなどが明らかとなったが、他人による承認の内容については曖昧な点も見られるため、今後の検討課題としたい。

本研究では山口県教育委員会のご理解を得て、調査データを分析・使用させていただいた。ここに記して謝意を表する次第である。

注

- 注1) 仲間関係の形成に関わる変数である「あなたは今後、スポーツを継続的に実施するとした場合、友達や仲間が出来そうですか」は、説明変数が本研究で使用したものとまったく同じであったにも関わらず、重相関係数が男子で.443、女子で.387であった。
- 注2) この調査は山口県教育委員会の依頼により、山口大学教育学部岡村豊太郎、遠藤勝恵の両氏がフィッシュパインの「行動意図予測モデル」などを参考にして作成した調査票を使って行われた。

引用・参考文献

- 1) 社会体育研究会：『スポーツクラブ』、新宿書房、1979、p.40
- 2) 八代 勉：「地域社会における体育・スポーツ経営」、宇土正彦編著『社会体育ハンドブック』大修館書店、1987、p.69
- 3) 園田碩哉：「いま地域に求められているもの」、森川貞夫編著『地域に生きるスポーツクラブ』国土社、1987、p.15
- 4) R.カイヨワ著、多田・塚崎訳：『遊びと人間』、講談社、1980、pp.39～41
- 5) A・H・マズロー著、小口忠彦監訳：『人間性の心理学』、産業能率大学出版部、1981、pp.100～

- 6) 中村陽吉：『対人場面の心理』，東京大学出版部，1986，p.53
- 7) 関 文恭：「欲求はどのように作られるか」，大橋正夫・佐々木薫編『社会心理学を学ぶ』，1979，p. 25
- 8) 福元和行・遠藤勝恵：「地域スポーツ・クラブへの女子の参加を規定する要因の分析」，山陰体育学研究，第10号，1995
- 9) 福元和行・遠藤勝恵：「地域スポーツ・クラブへの男子の参加を規定する要因の分析」，鳥取大学教育学部研究報告（教育科学），第37巻第2号，1995
- 10) 福元和行・遠藤勝恵：「地域社会における女子のスポーツの実施を規定する要因の分析」，山陰体育学研究，第11号，1996
- 11) 福元和行・遠藤勝恵：「スポーツの楽しさの認知と過去のスポーツ経験の関連性に関する研究」鳥取大学教育学部研究報告（教育科学），第38巻第1号，1996
- 12) 徳永幹雄他：『現代スポーツの社会心理』，遊戯社，1985
- 13) 松田岩男：『現代スポーツ心理学』，日本体育社，1973
- 14) 宇土・八代・中村編著：『体育経営管理学講義』，大修館書店，1989
- 15) 森川貞夫・佐伯聰夫編著：『スポーツ社会学講義』，大修館書店，1988

